



火 災

ては這って、確かめておいた非常口に
向かいます。非常口を開けて外階段や
煙の充満していない避難階段に降りら
れれば避難は一応成功です。

脱出できなければ籠城

煙がひどくて非常口まで行けそうに
なかったり、非常口のドアが施錠され
ていたり、階段室から煙が猛烈に吹き
出して来たりしたら、別の避難ルート
を探るか自分の部屋に戻って籠城しな
ければなりません。

籠城する場合は、ドアを閉め、隙間
にシーツやタオルで詰め物をして水を
かけ、煙や熱気が進入して来るのを防



ぎます。次に、あなたがそこで籠城し
ていることを外部に知らせます。電話
を使えばフロントに電話します。話
中なら外線で一〜九番してもよいで
しょう。電話が使えなければ、窓から
手を振ったりして合図します。

籠城を知らせることができれば、と
にかく消防隊が救助してくれるまで持
ちこたえる努力をします。ドアに毛布
をかぶせて水をたっぷりかけると、部
屋の温度が上がるのが防げます。浴槽
には水を張って、いざという時に備え
ます。浴室の構造や位置などにもより
ますが、浴室の開口部を同様に密閉し
て閉じ込める方法もあります。

避難ロープなどによる脱出

部屋によっては避難器具や避難ロー
プなどが準備されている場合もありま
すので、籠城の用意ができたなら、それ
らを使って脱出することも考えてくだ
さい。救助に時間がかかりそうで、か
つ安全性が高い方法があれば脱出した
方がよいでしょう。



シーツを避難ロープの替わりにした
り、雨樋を伝って脱出する人もいま
が客室が低層階にある場合に限られま
すし、よほど体力があり、かつ運がよく
ないと失敗します。万策尽きたときの
最後の賭けだと思っただ方がよいでし
ょう。

ベッドのマットを抱えて飛び降りた
りする人もいます。他に脱出方法がな
いと、高層階にいるのに地上が次第に
近く見えてきて、飛び降りても大丈夫
だと感じられてくるのだそうです。で
もそれは悪魔の誘惑です。まず確実に
死が待っていると考えてください。

デパート火災

デパートや大型スーパーなどで火災に巻き込まれたらどうしたらよいでしょう。



デパートなどの火災危険性は極めて大きい

デパートなどの火災には、次のような特徴があります。

① 可燃物が大量にある⇒火勢が強

く、延焼が早く、煙が大量に出る
② 窓等の開口部が少ない⇒停電すると暗くなる。避難路が限定される。

煙が充満しやすい

③ 大空間であるため、延焼拡大や煙の拡大を防ぐのが難しい

④ 客の数が多く、密度も高い

⑤ バーゲンセールなどで客が超高密になることがある

⑥ 老人、乳幼児など避難が困難な人が多い

これだけ危険要因が多い建物は滅多にありません。火災が発生して初期消火に失敗したら、大洋デパート火災(昭和四八年、一〇〇名死亡)のように、多数の死者が発生する危険性を常に持っているのです。

● スプリングカラーと適マークを安全の目安に

スプリングカラーがついていれば安心

これだけ危険性が高いのに、最近デパートなどの火災で多数の死者が出るものがなくなってきたのは、一つはスプリングカラーが設置されているものが多いためです。





火 災

デパート等については、消防法で延面積三〇〇平方メートル以上のものにスプリンクラー設備の設置が義務づけられています。火災が発生しても、スプリンクラーがついていればまず確実に消火できますから、「あわてて階段に殺到して将棋倒し」などということさえ気をつければ、一応安心してよいでしょう。

デパートやスーパーなどの大型店舗も適マーク制度の対象になっていません。消防法に違反してスプリンクラーなどの消防用設備などが不備ならば適マークは交付されません。

旅館・ホテル等と同様、適マークの有無を安全な店舗選びの目安にするるとよいでしょう。

スプリンクラーのないデパートなどで火災が発生したら

適マークが交付されていても、延面積三、〇〇〇平方メートル未満の店舗ならスプリンクラーがついていないものも少なくありません。

客の数が多く密度も高い大型店舗

は、避難には不利ですが、人の目が多いので火災の早期発見には有利です。火災が発生しても、延焼する前に従業員が駆けつけて消火しているケースが多いのです。



恐いのは、人の目のない所で火災が発生し、ある程度火災が大きくなってから客の多い店舗部分に延焼拡大してくるケースです。大洋デパート火災は、まさにその典型でした。こうなると、

客としては従業員の指示に従って避難するしかありません。客の数が多い店舗では、我がちに出口に殺到すると詰まってしまつて、かえって避難できる人の数が減つてしまいますし、将棋倒

しの惨事につながる恐れもあります。従業員の指示に従って、老人や子供連れなどを優先し、順番に避難しなければなりません。デパートなどには、整然と避難すれば一応安全なだけの階段の数と幅員が建築基準法で義務づけられていることは覚えておいてください。

この大切な避難階段を倉庫替わりにしている悪質な店舗もあります。避難階段を倉庫替わりにすると、避難に支障があるだけでなく、そこに放火される危険も高いのです。

適マークは、そんな悪質店舗を見分ける目安にもなりません。「避難階段を倉庫替わりにしている店舗を見つけたら消防署に連絡する」、「適マークが交付されていない大型店舗では買い物をしない」、あなたのそんな姿勢が結局安全な店舗を造っていくのです。

地下街の火災

大都市では駅前広場の地下などに地下街が広がっています。一般に、地下街で火災が発生したらきつと大惨事になるに違いない、と考える人が多いようです。



「地下街」とは何か

消防法や建築基準法で「地下街」というのは、道路や駅前広場などの地下

に、地下道に面して複数の店舗等が設置されているものを言います。ビルの地下のショッピング街や飲食店街などは、消防法や建築基準法では「地下街」ではなく「建築物の地階」として扱われています。

「地下街」は何故危険か

地下街は防災上次のような特徴があります。

- ① 窓等の開口部がほとんどない⇒停電すると暗くなる。避難路が限定される。煙が充満しやすい。消防隊が情報を得にくい
- ② 地下から煙や熱気が吹き上げてくるため、消防隊が進入しにくい
- ③ 可燃物の多い衣料品系の店舗と火気を使う飲食店系の店舗が多い
- ④ 不特定多数の人が利用しており、

●あわてて将棋倒しになるのが最も危険

老人や乳幼児も多い

- ⑤ 地上の道路に合わせて不定形に広がり、地下駅やビルの地階などと無秩序に接続されて迷路のような空間を形成しているものもある

「地下街」に対する厳しい規制

「地下街」はこのように火災危険性が高いので、消防法でも建築基準法でも、最大限の厳しい規制を行っています。ほとんどの（延面積一、〇〇〇平方メートル以上の）地下街にはスプリンクラーが設置されていますし、地下道の幅員も広く、一定距離以内に避難階段が確保され、一つの店舗の区画面積も制限され、消防隊が活動するための設備も整っています。

最近では、計画も厳しくチェックされています。万全の安全性が確認され



火 災

ないと建設そのものが許可されませんし、店舗等は地下一階だけに制限され、飲食店系と衣料品店系の店舗は区画され、ビルや地下駅との接続についても厳しい制限が課せられています。



最近建設されている地下街は、デパートなどよりも潜在危険性はいかえって少なくなっていると言えるかも知れません。

古い地下街には迷路のようなものもある

昭和四〇年代の初め頃までにできた地下街の中には、道路の地下にアメーバのように広がり、周辺のビルの地階

と無秩序に接続されているものもあります。このような地下街では、地上に逃げようとしてかえってビルの中に入り込んでしまったりします。接続されているビルの地階や駅等との間で避難誘導が統一に行われるとも限りません。

火災はスプリンクラーでまず消火できますが、その間に煙が充満しますし、地下にいる、という閉塞感もありますから、避難の際に相当の混乱が予想されます。パニックになって階段に殺到し将棋倒しになって圧死、というのが地下街の火災では最も懸念されるパターンです。



地下街で火災にあつたら、「この火災はスプリンクラーで必ず消火される」、「避難路も十分ある」と信じて、あわてずに避難誘導に従って避難するのが最も賢明な方法です。



建築物の地階の火災

建築物の地階で火災が起これると、避難も消防活動も難しく、大変危険です。よほど小さな店舗以外は、スプリンクラーのついていない店ではできるだけ避ける方が賢明です。

「地下街」よりも危険なものもある

ビルの地階に飲食店や店舗等が集まり、「○○地下街」などと称している場合があります。これは消防法や建築基準法でいう「地下街」ではありませんが、地下に立地する商店街という意味では、「地下街の火災」(二二六頁参照)の⑤を除けば「地下街」と同様の火災危険があります。

したがって、一フロアの床面積が一、〇〇〇平方メートル以上のものはスプリンクラーが設置されてい



す。しかし、ビルの地階の一階分の床面積はそのビルの敷地面積が上限です。一、〇〇〇平方メートル未満のものも少なくありません。そのようなものの中にはスプリンクラーが設置されていないものもあります。

また、通路部分の幅員も地下街ほど広くありませんし、床面積が小さいものでは階段が一つしかないものもあり

● スプリンクラーのないものではできるだけ避ける方が賢明

ます。計画についての特別なチェックもありませんから、地下二階や三階のものもあります。用途的な制限もありませんし、他のビルや地下駅との接続も特に制限されているわけではありません。というわけで、ビルの地階にある地下街類の商店街の中には、「地下街」よりも火災危険の大きいものが少なくないのです。

